

フィールド風

(現場)からの

228

宮田守男

高齢化社会に関心のある知人から今後の社会の見方の参考になると、佐藤愛子さんの「九十歳。何がめでたい」の著書が勧められて購読する。佐藤愛子さん

は西宮市育ちの大正12年生まれで、著名な作家。小説家の父と女優の母、異母兄に詩人のサトウハチローで知る人も多い。2016年5月まで1年間に渡って「女性セブン」に連載された人気エッセイに加筆修正

心に届くのだろうか。多くの言葉が心に残る。「長生き、するってたいへんなのね」と娘から90歳を過ぎると、しみじみ、つくづく、という感じで見られる歳を迎えた高齢期に

のが当たり前、何かの事故で出ないと、文句の電話が鳴り響く社会に、「もっと便利に、もっと早く、もっと長く、もっときれいに、もっとおいしいものを、もっと・もっと・もっと」の進歩社会

ばりわからない。小鳥のさえずりか小川のせせらぎのように耳を通り過ぎて行くとの記述は、60歳台の私とも思わず「その通り」と相槌を打つ。特に高齢者には、ゆっくりと発音して、滑舌な大きな声で話していか

誰もが迎える高齢化社会での生きる

覚悟を今から考えてみませんか

した内容。内容の面白さや、文字の大きさも適度で、次々に展開する内容も気になり一気に読んでしまう。一度は作家の肩書を下した幕を、編集者の熱心な誘いで書き綴った内容は、売り上げを意識した書き方で無く、本音の書き口が

「卒寿、十二がめでたえ」と言い放ち、体のあちこちの故障を嘆き、子供の立てる騒音を嫌う人達を叱る痛快さ。新幹線が3分アップ、高層ビル、どこでも平気で水が出る

に、更なる文化の進歩の必要性ではなく、人間の精神力の進歩が必ずこの内容に共感を持つ。そして、テレビの使命は伝達。最近の出演者や俳優の台詞が一心に集中しないとさっ

意識しすぎるテレビ番組の現状を危惧する指摘に、常々感じていた想いを溜飲する事が出来た。のんびりの老後の生活は、何だか気が抜けて楽しくない。気に



入った人は、「お先に」とも言わずあの世に行ってしまう。誰も会わず、電話もかからず、口も利かずという日が珍しくない日々は、誰もが通る道かも知れないが、「のんびりしよう」の考えはダメと書き綴った内容。今の日本、歳をとるとは嫌な事、どこか若

本の世界からの学びで芽生える図書環境の充実が、人材育成の基本だ。………

さが称えられる風潮を斬る内容に共感した著書に出合う事ができた。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)